

困りを持つ子どもと、その保護者への対応について ～保護者に寄り添い支援するために～

坂本 理 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館事業課担当係長

子育て世代の孤立は、想像以上の速さで進んでおり、これまで以上に子育てをする保護者への社会全体からの支援が求められています。では、「寄り添う」とは、「寄り添う支援」とはどういう事でしょう。

「寄り添う」といっても、定義が不明確で、答えはありません。ただ、「寄り添う」である以上、主体(中心となる主役)はあくまで子どもや保護者当人です。樹木で例えると、樹木が保護者や子どもで、それに寄り添い、世話をして支えるのが支援者です。でも、最終的に育っていくのは樹木そのものですし、樹木自らが持っている力で生き抜くしかありません。樹木と言っても、種類も育成環境も様々です。そんな樹木の成長を応援するために必要な事は、その樹木を周囲の状況を含めてよく「観察」する事です。「観察」によって、何が必要か分かるのです。

精神医学者サリバンは「関与しながらの観察」を提唱しています。話を聴きながら観察をする面談では、自分の反応もすぐ相手の振る舞いに影響します。相手への対応を誠実にすれば、視界は狭くなり、観察を重視すれば、相手への共感的態度が疎かになりがちです。ただ、優先すべきは相手への共感的態度です。

我が子に障がい告知を受けたり、障がいではないかと思ったりしている保護者の多くは、孤立感と同時に、自分が悪いのではないかと思っておられます。それには、きちんと否定し、心情に寄り添いましょう。一見何もないように振る舞っておられても、内心は焦りや不安が高いと思ってください。また、子どもの課題点を挙げるだけでなく、保護者の不安に寄り添う事が大切です。安易な慰めも良くありません。課題点にはやがて直面するし、療育など必要な支援に繋ぐのは早い方がいいからです。専門機関に繋がると、直接的な支援に加え、保護者同士が繋がる契機になり、大きな支援となります。成長して欲しい思いが強いと課題点を羅列しがちですが、必ず良い所も添えましょう。「連絡帳」等に、一言肯定的な事を添えるだけで、保護者が受ける印象は全く変わります。問題点を伝えるともめるので、何も伝えないという方針は無責任です。むしろ、同様の不安や焦燥感を持つ保護者は他にも大勢いて、自分は孤立している訳ではないという事を早い段階で知る事が、保護者にとって大きな力になるのです。

いわゆる「問題行動」は、「問題提起行動」と呼ぶようになってきています。支援者側に、「今の関わりは問題があり、こういう行動になる。改善、工夫の必要がある」と教えてくれる行動として捉えるのです。また、どんなに問題提起行動が連続しても、必ず例外はあります。その例外を見逃さず、すかさず強化を与える積み重ねが、行動変容につながる可能性を広げます。褒めるところが無ければ、褒められる場面を工夫して作るのです。できない事を求めず、できる事を求めましょう。支援者が思考停止せずに真剣に探せば、良い所は必ず見つかるという確信を持ち支援するのです。

支援者は、人間の存在は単純なものではなく、ネガティブに見える事にこそ、深みや豊かさ、味わい、多様な世界観をもたらすものがあるという考えを持って接したいものです。精神医学者杉山登志郎先生は、「発達の凸凹はマイナスではない。10歳を過ぎ、青年期にさしかかると、凸凹はプラスにひっくり返る事が多い。多動は強い好奇心や高い活動性を、社会的な馴染みにくさは周囲の影響を受けにくい事、さらに得意領域への集中力の高さに転じる事が多い」と、マイナスに見える発達の凸凹は決してマイナスではないという事を強調しています。

保護者は、困難な育児に向き合って来られました。支援者は、保護者の大変さ、頑張りに共感する姿勢を持ち、関わりの難しい子を育てて来られた事への敬意を忘れない事です。定型発達の子育てでも大変な事です。同情するのではなく、育児の困難に向き合って来られた事へ敬意を持って寄り添う事が大切だと思っています。